

ドイツにおける自己の「語り」の変遷 ——個人化論と生活史研究を中心として——

The Transformation of Self-Narratives in Germany

伊藤 美登里*
Midori ITO

<キーワード>

語り 生活史 自伝 自己 ドイツ 個人化 第二の近代 U・ベック

<要 約>

本稿では、ドイツにおける自己の「語り」の変遷について考察する。1970, 80年代の自伝研究における有力な説では、批判理論の「個人の終焉」やD・リースマンの「他人指向」に依拠する形で、後期資本主義産業社会に入り、自伝の構造——自己の「語り」——が、従来の、自己形成の歴史として、自己が一回的で代替不可能な閉じたモナドとして描写されるものから、他者の期待に合わせて変化する自己を描写するものへと変化したとされた。

しかし、1980年代半ば以降、U・ベックらによる新たな「個人化」論の勃興と軌を一にするように、自伝・生活史研究における主な関心が、社会構造が人びとに安定的なライフコースを提供できなくなったなかで、個々人はいかに人生を同一的なものとして展開しうるかという方向に移行した。そこには、初期資本主義の起業家を範とする古典的な「個人」や「主体」は終焉したものの、別の「主体」が登場してきており、個々人はより自己準拠的に人生を展開しなくてはならないという認識が見られる。近年における自己の「語り」においては、理想とすべき標準的な生き方や価値観はもはや存在せず、いくつもの生き方のレパートリーからその時々において個人が選択し、それにそった形で自己が語られるという傾向が見られる。

1. はじめに——問題の所在

「自己の語り」にかんする研究が、近年、日本社会において相次いで出版されている。例えば、片桐雅隆（2000, 2003）には、日本とアメリカ、双方の「自己の『語り』」の変遷や、自己の語りが「大きな物語」から解放され個人化していることを論じた研究がある。浅野智彦（2001）は、「自己」というものがそもそも自分についての物語をつうじてあらわれると論じる。さらに、野口裕二（2005）においては、臨床社会学の立場から、個人化する現代社会における生存戦略として自己の「語り」の必要性が説かれる。他方、生活史の「語り」を中心テーマにおく研究会も盛んである。

本稿では、このような日本の研究状況を念頭におきつつ、これまで日本で言及されることの少なかった、ドイツにおける自己の「語り」の変遷について考察する。そのさい、資料としてドイツの自伝研究や「個人化」論および生活史研究を用いる¹⁾²⁾。

人生にかんする「語りの変遷」というテーマをもってここで想定しているのは、語りの内容やスタイルにおける、一定の共通性とその変化である。そこには、時代に特有の指向性や人生観が影響をおよぼしているであろう。というのは、自己についての「語り」は、まったく独創的に個人によって創造されるわけではないからである。

自伝や生活史において語られた内容には、井上俊のいう「文化の一部として存在する物語」としての側面と、その物語にのっとりながらも個人が発揮する独創性の側面とがある。前者の側面について、井上はこう論ずる。われわれが自分の物語を構成するさいには、われわれをとりまくシンボル空間のなかに文化の一部として存在する物語が重要な役割をはたす。この物語は、神話や伝説、童話や小説、映画やテレビなどをつうじて流布される。われわれは、幼少時からそれらにとり囲まれ、それらを認知や解釈の枠組として内面化し、その枠組をとおして人生の出来事や事件に秩序と意味を与える。自分自身の物語を構成するさいにも、それらの物語をモデルや素材として利用する。

他方、それらの物語は、物語形成にさいし、妥当なあるいは規範的な物語として拘束要因ともなる（井上 1997: 24）。

井上の研究をうけ、小林多寿子（2002）は、2000年に発行された自己語りを分析し、それらにおいても「文化の一部として存在する物語」がとりいれられていると指摘する。というのも、このような物語は「多くの他者も共有しているはずの価値観や規範を織り込み済み」であり、それらを取りこむことによって、読者として想定している「他者」からの批准の可能性が一層高まるからである。

同様のことを、C・W・ミルズはすでに「動機」にかんして指摘していた。彼によれば、人はさまざまな状況にたいする行為の準則や規範におうじて、その状況に適した動機の語彙を学ぶ。ある行為にたいする動機の語彙は、時代や社会、階層や職業や所属集団、あるいは地域性により異なる（Mills 1963: 439-51=1971: 344-55）。この視点は、動機のみならず、片桐（2000）が指摘するように、自己の語り一般へと拡大することができよう。

つまり、自己の人生は——より正確に表現するなら、自己の人生の「ある部分」は——、読者として想定している他者による批准を求めて、流通している、ないし社会の要請する規範や価値観を典拠としてくみこむ形で語られる。それは、ミルズが示したように集団や地域や時代によって異なりうる。本稿では、同一社会内における時代差に着目し、「第二の近代」（U・ベック）、「ハイ・モダニティ」（A・ギデンズ）、「流動的近代」（Z・バウマン）などと呼ばれる社会の構造変化の前後における、自己の人生についての語りの変化と、そこからうかがえる「生き方モデル」の変遷を探りたい。

以下では、まず、「2」で1970年公刊のB・ノイマンの自伝研究を、次いで、「3」と「4」でノイマンの結論に反対の立場をとるM・コーリーとベックの「個人化」論を、さらに、「5」では最近の生活史研究の成果を見てゆき、「6」で以上の議論の考察をおこなう。

2. ノイマンの自伝研究

ノイマンは、中世から1970年にいたるまでの期間に、大きく分けて2回、すなわちルネサンス期（から近代の最盛期）と20世紀に、ヨーロッパで自伝の構造変化が生じたと論ずる。彼によれば、中世後期の自伝の記述は、書き手である個人が完全に彼の社会的役割と調和しており、伝統によって予め与えられた振舞いの型にそって生きているような印象を人に与える。そこでは外面的な生活が記述されるのみで、内面性という次元が欠けている。さらに、その前提として自己省察が必要とされる、字義どおりのアイデンティティもまだ存在しない (Neumann 1970: 175)。

これにたいし、ルネサンスに始まる、いわゆる「近代的」自伝においては、家族の年代記がますます個人化されていく。ここでは、自伝の作者は、代々続く氏族や家族の一部としての自分を語るのでも、家族や一族のために自分が何をしたのかのみ語るのでもなく、他と代替不可能な個人として、彼を作り上げているもの、すなわち子供時代、青春時代、教育についてもっぱら語るようになる。個人の人生は自己形成の歴史として、自己は一回的で代替不可能な閉じたモナドとして描写される。このような傾向がドイツにおいて頂点にたったのは1785年から1870年の時期で、とりわけ市民層上層の男性においてそのような型の自伝が書かれた。そこでは、独自の特性をもつ自己が成熟し、アイデンティティが獲得され、社会的役割がひきうけられ、社会への適応が最終的になされる時点までが描写される (ebd. 180-3)。

しかし、20世紀が経過するうちに上述のような特徴をもつ自伝は次第に消滅し、かわって別の特徴をもつ自伝が増大する。そこでは、語りのクライマックスは、独自のアイデンティティの獲得にではなく、役割を摩擦なく名人芸並みに交換していくことにある。内面化された価値規準にではなく、他者が自分に与える「信号」にしたがって振舞い、そこに幸せを感じる自己が描かれる傾向も見られる (ebd. 184-6)。

20世紀における自伝の構造変化という認識は、

ノイマンのみにとどまらない。例えば、L・フリードリクスは、とくにワイマール時代と60年代以降の自伝にノイマンがあげたような特徴が見られると指摘し (Friedrichs 1999: 19-21)、M・フォークトによる女性の自伝の歴史的研究は、ノイマン説にもとづいてなされている (Vogt 1981)。それどころか、1980年代には、自伝研究において「自伝の終焉」が喧伝される (Finck 1999: 11)。

このような自伝の構造変化を、ノイマンは、D・リースマンの社会的性格論や、M・ホルクハイマー、Th・W・アドルノ、H・マルクーゼ、E・フロムといったフランクフルト学派の理論を引用しつつ、社会の構造変化やそれにともない変化した適応的性格 (リースマンの用語では「同調性の様式」と関連づけ、以下のように説明する。

伝統指向型の社会においては、中世ヨーロッパの自伝のように、ある者にあてがわれた社会的役割とその個人は完全に一致しているように描かれる。これにたいし、自己形成の歴史としての「近代的な」自伝は、内部指向型の社会的性格が支配的となる、近代初期の市民社会と関連がある。この時期の自伝においては、教養ある市民層上層の個性の発達過程が語られ、内面化された「ジャイロスコープ (羅針盤)」が、外界がいかに変化しようとも、個人のさらなる態度の連続性を保証するとノイマンは論ずる (Neumann 1970: 175-88)。

しかし、次第に、内部指向にかわって他人指向が適応的な社会的性格となる。ここでノイマンは、リースマンの社会的性格論に批判理論を結びつける。すなわち、高度に発展した、過剰生産する後期資本主義産業社会は、愉快的消費を餌にして生きる。この消費は、マスメディアをつうじ人々の「内面性」と結びつくことで社会にいつ何時でも影響を与えうる。このような病的な消費欲があって初めて完全な他人指向が可能になる。自我概念は市場の影響をより被るようになり、「私」の意味はあなたが望むような私であることに存するようになる。この時期に、自伝の構造が、他者の期待に合わせて変化する自己を記述するものへと変化したというのがノイマンの説である (ebd. 184-90)。

3. コーリーの自伝およびライフコース研究

コーリーは、近代初頭から産業革命期にかけて自伝の構造変化が生じたとする点では先にあげたノイマンと見解を同じくするが、20世紀後半における自伝の変化にかんする見解は異なる。以下、コーリーの論文を見ていこう。

コーリーによれば、リースマンのいう、伝統指向型から内部指向型への変化とは、「個人化」の過程、すなわち身分的で地域的な諸拘束からの個人の解放という包括的過程のことである。この過程において、自伝のパースペクティブが、年代記作成者の構想から発展史的構想へと変化した。前者においては、人生が外界の歴史的出来事ないし季節による出来事から構造化されるのにたいし、後者においては、固有の「私」をめぐる、その「私」によって人生の構造が編成される。従来、家族や氏族といった包括的な単位の一部としてのみ語ることが可能であった個人の人生は、独自の経過プログラムを作り出すようになる。このような変化がドイツで生じたのは、18世紀最後の数十年間においてのことである (Kohli 1985: 10-3)。ここまでのコーリーの議論は、ノイマンのそれと大きな違いはない。しかし、20世紀後半における変化にかんしては、コーリーは次のように述べる。

自分は、批判理論の「個人の終焉」という見解にはくみしない。批判理論は、労働条件の社会的変化により個人化された人生設計がますます困難になっていることを強調し、そのような変化に適応した人間の性格特性が生産されていると論じているが、ライフコースの経験的調査結果からは、逆に、今日新しい個人化推進力が生じていることが見てとれる。少なくともミクロ社会学の領域においては、個人による決定が増え、さまざまな行為の選択を個人の決定にゆだね、その結果を個人に帰責する傾向が強まっている。従来は人生においていかなる決定を下すかについての負荷を制度化されたライフコース・モデルが軽減していたが、このモデルの解消にともない、個人が自分自身を参照するようになった。自己への関連づ

けが強化されたのである。しかも、従来個人化と無縁であった女性や労働者をも個人化過程はまきこみつつある。このような状況下では、生活史の連続性は、もはや諸集団への安定的な帰属性によってではなく、人生において生じる一連の構造転換と断絶とを個々人によって生活史上の諸経過および諸目標へとつねに新たに調整し直すことにより保証される (Kohli 1985: 23-4, 1994: 232-4)。

このように、コーリーは20世紀後半に個人の終焉ではなく、新たな個人化推進力が生じたと主張する。また、新たに生じた個人化推進力のもとでは、個々人は、以前のような制度によって保証された社会構造のもとで自立した生き方を追求するのではない。社会が安定的なライフコースを提供できなくなった結果、個人がより自分に依拠する形で人生を展開する方向に全体として向かっていると彼は見ている。

4. ベックの「個人化」論と「準主体」論

次に、20世紀後半における「個人化」論争の口火を切ったベックの個人化にかんする議論を見ていこう。彼によれば、20世紀後半にドイツ社会は、(それ以前の「近代」を「第一の近代」とするのにたいし)「第二の近代」の局面に突入した。この新局面がもつ特徴の一つが、さらなる「個人化」である。「個人化」とは、ベックにおいては、一方で、社会システムが階級や家族といった集団をではなく個人を単位としつつあること、他方で、それと関連する形で (しかしそれとは独立して)、自分の人生を歩みたいという希望が増大しつつあることを意味する (Beck 1986: 206-7=1998: 253-5)。個々人は、生存戦略として、自己中心的世界像をもたなくてはならないとして、ベックは以下のように主張する。

個人化した社会において、個々人は、自分自身のライフコースや能力や立場の認識やパートナー関係などの関連で、自分自身をその行為の中心としてとらえることを学

ばなくてはならない。・・・求められているのは、自我をその中心にもち、自我に行為の機会をあたえ、このようにして、自分のライフコースにかんして突然あらわれてきた形成および決定の可能性を有意義に処理できるような、積極的な日常行為モデルである。・・・自己中心的世界像が展開されなくてはならない。(ebd. 217=267-8)³⁾

このように、自分の人生を自分が選択し組み立てるといった態度が、時代が求める「生き方モデル」になっているとベックは見ている。そして、この主観次元におけるさらなる個人化が生活史の叙述形態にもあらわれ、出来事の原因を自分以外のものに求めるのではなく、自分の行為の結果としてある出来事が生じたこととらえる、「個人主義的」叙述形態が支配的になっていると彼は主張する。

西洋世界において、自分の人生を送るという望みほど普及した望みはない。…生活史において、「突然降りかかったり」、「予め与えられていたり」、「強制されたり」する、「運命による打撃」や「境遇」や「外的な諸力」のみが話題になる場合があるとすれば、それは定式化された理論の反駁の事例であろう。個々人は、熟考のすえ表明された意見という意味において、自分が、少なくとも、自分と自分の人生をとりまく状況の形成者でもあることを知覚し、そのように叙述しなくてはならない。まさに、その形成の試みが失敗した場合や拒絶された場合であったとしても、自分の人生の実用的でおおまかな指標は、したがって、自分の生活史を個人主義的で行動主義的に語る形態である。人生の出来事の原因は、一義的には、「外界」の何かにあるのではなく、「自分の」決定（決定しなかったこと、ゆるがせにしたこと、怠惰、無能力、敗北）にもあるとされる。(Beck 1997a: 9-13)

しかし、ベックがここで展開している「個人」は、第一の近代における「個人」と同じではないことに留意すべきである。彼によれば、現在生じているのは、近代初期に登場した市民的個人がその死後に再起したものではなく、それとは別の、新種の社会的主体性と個性である (Beck 1990: 58-61) (Beck und Beck-Gernsheim 1993)。第二の近代における「主体」は、第一の近代におけるそれとは異なった特性をもつ。それをベックは「準主体 (Quasi-Subjekte)」と名づける。

ベックによれば、第一の近代において、人は、あてがわれた、一義的で、矛盾のない主体境界を有し、それが主体性やアイデンティティや個性を可能にしていたが、第二の近代においては、可能な主体境界は多元化され、文脈におうじてさまざまに境界づけがなされる。第一の近代では、何が私にふさわしいかという問いに、集団として、予め与えられた社会的な型（階級や性など）にしたがって回答が与えられたが、それはもはや不可能で、個々人で答えなくてはならない。そのような状況下では、新しい複数のアイデンティティ・タイプにたいする指向性が生まれ、主体の境界線引きの必要性は肯定的な虚構としてうけいられる。確固とした、代替不可能な主体としての把握は不可能となり、個人は「準主体」として把握される。そこでは、個人は文脈の構成要素となり、その文脈が彼の主体性を規定するが、それにもかかわらず、彼は彼の主体性について（ともに）決定を下す。個人は存続する。しかもこれまで以上に、虚構的な決定者、彼自身と彼の生活史の著作者となる。そして、語られた生活史の虚構性が承認される (Beck, Bonß und Lau 2001: 42-6)。

以上が、ベックが論ずる、第二の近代における主体の在り方である。

5. 生活史研究における新たな傾向

このようにベックの見解は、第二の近代における「個人化」や「主体」の在り方を理論的に展開したものであった。ライフコース研究者のコーリーは、ベックと比べればより具体的なデータか

ら結論を導いているが、実際の「語り」のデータにはほとんど言及していない。生活史の「語り」においては、近年どのような変化が生じているのだろうか。

生活史研究では、1970年代に入るところから、「新たな始まり」と呼ばれる傾向が見られる。それは、ドイツのみならずイタリア、フランス、ポーランド、カナダ、スイス、イギリス、第三世界などでも生じたものであった。この「新たな始まり」の事実上の社会的基盤を築いたのは新たな個人化推進力であること、およびそれが生活史コミュニケーションにたいする新しい要求と可能性を生じせしめたことが、生活史研究者の共通認識となっている (Fuchs-Heinritz 2005: 81-119)。以下では、この「新たな始まり」に属する、三つの生活史研究を見ていく。これらの研究は、いずれもベックの「個人化」論や「第二の近代」論に触発され、社会構造が変化するなか、いかなる語りの型や人生の指向性が見うけられるかという関心からおこなわれたものである。

まず、時間決めて働く女性の生活史を調査したM・ポーラプ＝サーの分析を見ていこう。時間決めて女性労働者は、個人化傾向——安定的ライフコースの解消という観点からすれば生活史の不確実性——が非常に強く出現する集団として調査対象に設定された。彼女らは、独身または離別していることが多く、子供がいることはまれで、教育程度が高い。職場を転々とし、自分の収入に己の生存保障がかかっている集団という意味で、生活史の不確実性が高い (Wohlrab-Sahr 1992: 223)。

生活上の不確実性をいかに克服しているかという観点において、ポーラプ＝サーは、被調査者の生活史を七つのタイプに分類し、このようにさまざまなタイプが存在するものの、全体として以下のような傾向が見られると結論づけた。すなわち、彼女らにおいては、目標を目指しての「二者択一の決断」によって行為を統一するという態度が優位を保つことはもはやなく、物事の優先順位が明白でない。そこに生活史が照準を定めるような、新たな目標設定が欠如しているからである。ライフコースにおける逐次的連続と、それに適合

するように調整された生活史の指向性との結びつき——第一の近代における「ライフコースの制度化」の観念においてはそれが想定されていたのだが——は、壊されている。そのかわりに登場しているのが、その時々の方角づけをおこなう、局面にとって適した「期限付きのパスペクティブ」である (ebd. 234-5)。

次に、都市に住むフリー・ジャーナリスト男女を対象に聞き取り調査をおこなったL・ベーリンガーの分析を見よう。彼女は次のような立場をとる。すなわち、社会の構造変化の結果、人生の不確実性や非連続性や矛盾を経験するなか、人はますます自己との関連づけにおいて自己アイデンティティを形成するようになった。アイデンティティはいざとなればほとんど随意に変更可能であるが、他方、一貫性と連続性は、最低限の相対的に持続的な構造として、人生における未決定性への建設的対処を可能にするための前提条件であり、個人によって作り出されなくてはならない。したがって、彼女の研究のテーマは、社会の側で人生の一貫性を提供できなくなった時代に、自らの経験の多様性や矛盾性に直面しながら、人はいかに一貫性や連続性を打ち立て、自己アイデンティティを形成するのかということになる。被調査者を、教育程度も所得も高く、前衛的生活様式を送る者の多い、フリー・ジャーナリストに設定した理由は、そういった恵まれた集団こそ、現今の社会状況下、己の人生を実践的にも心理的にも全うするために何が必要かを研究する題材として最適であると、彼女が考えたことにある (Behringer 1998: 50-223)。

このような集団への生活史調査および指向性や世界観にかんする聞き取り調査から、ベーリンガーが得た見地は以下のようなものである。すなわち、自己発見と自己実現が、被調査者が準拠する生活史コンセプトである。しかし、予め与えられた「善き人生」はもはや存在しないので、自己実現の追求は予め与えられた目標と結びつくのではなく、道程自体が目標となっている。善き人生の方向性も多種多様である。また、ベーリンガーは、人生の開放性ないし未決定性にいかに対処し

ているかという観点から被調査者を四つのタイプに分類している (ebd. 92-193)。

最後に、5人の研究者がそれぞれの調査で集めた生活史を資料として、より包括的に近年における生活史の語りの特徴を分析したW・ボンズらの研究を見ていこう。彼らの研究の出発点は、人間の行為にかんして自由の余地が広げられた第二の近代において、個人化された行為者は、いかにして、そしてどのような主体概念を基礎として、社会的および個人的なアイデンティティを形成し、生活史の確実性を、換言するなら自身のライフコースにかんする多かれ少なかれ一義的な期待可能性と形成可能性を、確立するのかという点にある (Bonß u.a. 2004: 211-3)。

30歳代および40歳代の男女、60人のインタビューを分析した結果、ボンズらは以下のような見地にたった。まず、第一の近代における生活史の模範的記述においては、たとえ道程 (Weg) が不確実で未定であったとしても、発展の目標 (Ziel) は連続的な発展のように明確であった。これにたいして、第二の近代においては、生活史の発展の道程のみならず目標までもがもはや確実でも明確でもない (ebd. 213-4)。

また、不確実で同時に否定的に評価された生活史上の出来事とのとりくみにおいて、いかなる戦略がとられるのかという観点から、彼らは生活史を五つのタイプに分けた⁴⁾。すなわち、伝統によって与えられた規範を守る「伝統遵守」、一種の倫理ないし理想としての規範に指向する「適合」、市場モデルに指向する「最適化」、啓蒙の概念と結びつき、予め与えられた規範から距離をとる「自律化」、予め存在する規範にたいし、状況におうじてしたがったり拒否したりする「文脈化」の五つである (ebd. 222-9)。

ベックが「あれもこれも」という言葉で表現したように、第二の近代においては必ずしも特定のタイプが排他支配的になるわけではない (Beck 1997b: 195) ことを勘案するなら、これらのタイプはいずれも生活史の確実性をうまく確立することが可能で、生活史形成に適するとボンズらを見る。

「伝統遵守」と「適合」タイプの長所は、複雑性の縮減にある。これらのタイプは、社会全体が大きな物語をもちや提供しないために、期待構造が一義的であるように思える、宗教、イデオロギー、地域といった共同体に準拠の文脈を変える。「最適化」および「自律化」タイプは、自身の生活史形成の成功・不成功を個人の手ゆだねる。これらのタイプは、設計事務所としての自己理解が必要だとするベックのテーゼと一致する。しかし、高い失業率や離婚率が続くなかでは個人に相当の負荷がかかるという短所をもつ。「文脈化」タイプにおいては、生活史全体の発展という観点では放棄され、比較的短期の個々の生活史プロジェクトが登場する。このタイプの長所は、予期せざる生活上の出来事にたいする比較的大きな柔軟性にある (Bonß u.a. 2004: 231-2)。このようにボンズらの生活史分析では、ベックの提示する「生き方モデル」も複数あるなかの一タイプに帰せられている。

このような分析からボンズらが導いた結論はこうである。確実性は、一義性をつうじてのみならず、偶然性のくみこみや、期待の曖昧化、あるいは自分自身の感情への立ち戻りによっても作られる。生活史の確実性を確保するための、上述の諸戦略は、生涯一貫してとられるようなものではない。いくつもの戦略が社会的に用意されており、そのなかから個人々々人がその時々状況におうじて選択するのである (ebd. 233)。

さて、上で見た三つの生活史研究には、以下の共通点が認められる。第一に、彼らはともにベックの「個人化」論や「第二の近代」論に触発され、生活史を分析している。第二に、どのような自分になるのかという「目標」ですら社会的に一義的ではなく、自分で設定すべきものになっているという認識を彼らは共有している。第三に、分類の観点に差異は見られるものの、彼らはみな生活史の語りをいくつかのタイプに分けている。これらのタイプは、不確実な人生を送るうえで個人がとる「戦略」でもある。複数のタイプの存在は、一方で、個人化された人間が人生の目標や生き方モデルを無から創造しているわけではなく、社会に

より予め与えられた複数の選択肢が存在することを示している。しかし、他方で、一つの支配的なタイプに生活史の語りのスタイルがもはや収斂されえないこと、したがって、人びとに社会がもはや一義的な「生き方モデル」を提供できないということをも示している。しかも、三つの生活史研究においては、一つのタイプや生き方モデルをある人物が生涯一貫してとるとは想定されていない。

6. 「個人」の在り方の変化と自己語りの変化——議論の分析

これまで、ノイマンの自伝分析における自己の語られ方から、コーリー、ベックの個人化論における「個人」の在り方や、最近の生活史に見られる語りの特徴までを概観してきた。ここでは、一方の、批判理論の時代診断やリースマンの社会的性格論にその理論的基礎をおいたノイマンの結論と、他方の、コーリーやベックの「個人化」論およびそれに依拠する生活史研究との相違をどうとらえるべきかの検討をおこなう。

M・シュレアは、ホルクハイマーやアドルノが指摘するような古典的「個人」や「主体」は確かに終焉したが、別の「主体」が登場してきており、それをベックがとらえていると指摘する。すなわち、「ホルクハイマーやアドルノは、個性を初期資本主義起業家という特殊なタイプと同一視していたため、そもそも彼らにはそれらの没落が個人の終焉として、『個性の普遍的解消』として、映った」(Schroer 2001: 59)。しかし、「このような人間や主体は、ポストモダンの個人をとりまく状況の記述にはもはや適切ではなく、…ベックにおいて…、大いなる、デミウルゴスの主体からの別離がなされている」(Schroer 2000: 35)。先に見た「準主体」がそうである。

また、シュレアによれば、N・ルーマン、M・フーコー、ベック——彼らは、その理論的な相違点にとりあげられることが多いが、決定過程への個々人のより強い関与から出発している点においては共通点をもつ。そこでは、もはや社会的集団への所属をつうじてではなく、より一層の自己関

連づけをつうじて個人が自分を定義づけるものと想定されている。もっとも、一方のルーマンやフーコーの理論は、「主体の終焉」を認めたいうえで、「主体」から別離するのにたいし、他方のベックは別の戦略をとるのではあるが(Schroer 2000: 35-9, 2001: 443-8)。

三上剛史は、ギデンズのライフ・ポリティックスの主体となるようなセルフ・アイデンティティの再構成を、社会の規範の拡散ないし弱体化にたいし、より構成力のあるアイデンティティへと強化してゆく戦略として見る(三上 2003: 186-7)。ベックの個人化論は、彼自身述べているように、ギデンズのライフ・ポリティックスと共通するところがあり(Beck 1997b: 186)、三上の指摘はベックにもあてはまる。すなわち、ベックの個人化論において求められている「人間像」や「準主体」は、社会の規範や制度の確実性が弱まり、個々人が制度に頼ることをよりゆるされなくなった時代において、社会からの個人にたいする負荷(要求度)を強化することで乗り切ろうとする戦略と考えることができる。

先に見た近年の生活史研究においても、古典的「個人」観から別離したベックの「個人化」テーゼを支持する傾向が強かった。そして、生活史を分析した研究の検討から判明したことは、指向される「自己」がいかにあるべきかということすら社会的に定まっておらず、社会的に提供されているさまざまな戦略の型が存在し、これらのなかから個人が状況におうじて選択するということがあった。

そもそも、第一の近代の時期においても自己語りの型は均一ではなく、性や階級による違いが見られた。しかし、労働者階級や女性の語りは、市民層男性に典型的な「近代的な自伝」の特徴を備えていないものの、いずれは「近代的な自伝」になる(べき)であろうという「啓蒙的」発想が存在した(Vogt 1981)(伊藤 2003: 18-34)。どれが社会的にもっとも「正しい」語りや生き方であるか、という価値の階梯が厳然として存在したのである。

しかし、今や、確固たる外的規範への方向づけ

も、自己定義づけの支配的な型も、型にかんする価値の階梯もないまま、個々人は己のアイデンティティを自分で定義づけるといふ課題に直面する。長期的使用に耐えうる選択肢はない。このような状況下、「生活史の虚構性を認識」(Beck, Bonß und Lau 2001: 44)しつつも、その時々でその時々における生活史を語るという実践がドイツ社会においてより必要とされる。換言すれば、「選択したその時々への行動すべてを人生全体へ統合するという必要性と可能性が人に残される」(Hitzler und Honer 1994: 311)。近年における生活史研究の隆盛も、このような社会状況と関連があるようだ。フクス＝ヘインリッツが述べているように、われわれがわれわれを個人の生活史から理解するという行為、生活史を語るという行為それ自体が、社会諸領域の細分化を克服するための手段、ばらばらに漂流するさまざまな部分世界を個人において結合する接合剤 (Fuchs-Heinritz 2005: 80-1) としての機能をはたしているのだから。

最後に、リースマンの他人指向型を知識社会学的にどう位置づけるかについては、三上の指摘が示唆的である。彼は、リースマンの他人指向は、内部指向の段階と、アイデンティティが拡散し、その「代償として自己への回帰が志向される」ようになった現段階との間の「移行タイプ」として考えるべきだと主張する (三上 2003: 125)。

三上によれば、第一の近代は、伝統社会の枠組をいわば強迫観念として引きずり続けた社会であった。そこにおける生活史の語りは、集合体 (前近代的な地域共同体や身分社会) から個人が相対的に自律しながら新しい社会 (市民社会、産業社会、都市社会) を形成してゆく過程で生まれたものと見ることができる。アイデンティティも、第一の近代におけるアイデンティティの意味は、さまざまな状況的自己のもつ差異性を統合する実体的同一性であり、第二の近代におけるアイデンティティ観は、逆に、まず状況的差異の還元不可能性があり、さまざまな想定された (作られた) 実体的同一性はこの差異の展開に従属するものとして、つねに再構成にむけて開かれたものとなる

(同上 76-9)。このような状況にあつては、アイデンティティはそもそも拡散するものとなり、自己への回帰はその代償として追求される。

1970年にノイマンが指摘した20世紀における自伝の構造変化は、リースマンの社会的性格論をその理論的バックボーンにもっていた。したがって、ノイマンが指摘した20世紀の自伝の特徴も、近代初頭の古典的「個人」ないし「主体」から、第二の近代における「個人」ないし「主体」へと変化する「移行段階」を記述したものと考えることができよう。

7. むすび

以上、本稿では、自伝研究や生活史研究そして個人化論を題材として、ドイツにおける自己語りの変遷を探った。その結果、近代初頭より「正統」とされた自己語りの型においては、自己の人生が自己形成の歴史として、自己が一回的で代替不可能な閉じたモノイドとして描写されること、それに対応するのが近代の古典的「個人」観であることを確認した。しかし、また、近年においては、社会的に提供されている人生の解釈の型は、一つの「正統」とされるそれが存在するのではなく、複数存在すること、さらには、一貫した自己の人生についての語りを困難にする社会状況のもと、個人に一層負荷を与えるような形で自己の語りがますます要請されており、理論面ではベックの「準主体」がこれに対応することも確認できた。加えて、近代初期と現代との中間には、他者の期待に合わせて変化する自己を記述する「移行形態」が存在することも確認された。

注

- 1) コーリーやベックは、外的に観察可能な状況や出来事である「ライフコース (Lebenslauf)」にたいし、人生の出来事を語る内容や形態を「Biographie」と呼ぶ (Beck 1997a: 12) (Kohli 1985: 3, 1995: 177)。コーリーが「Biographie = Lebensgeschichte」としている

(Kohli 1995: 177) ことから, ここでは Biographie を「生活史」と訳す。

- 2) 生活史と自伝は, 語られたものと書かれたものという違いはあるが, 聞き手ないし読者として他者を想定しており, 「文化の一部として存在する物語」をくみこみながら作られる人生の物語である (小林 2002) 点においては共通する。この点において, 自伝と生活史に共通に見られる「語り」の歴史的比較は可能であると考えられる。
- 3) 訳は, 必ずしも翻訳書にしたがってはいない。
- 4) ここではボンスらの分類のみ紹介するが, 他の二つの研究におけるタイプ分けにはボンスらの分類と共通する点も多く見られる。

文献

- 浅野智彦, 2001, 『自己の物語論的接近』勁草書房。
- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft*, Frankfurt / M: Suhrkamp Verlag. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会』法政大学出版局.)
- , 1990, “Freiheit oder Liebe,” Ulrich Beck und Elisabeth Beck-Gernsheim, *Das ganz normale Chaos der Liebe*, Frankfurt / M: Suhrkamp Verlag, 20-64.
- , 1997a, “Was meint »eigenes Leben«?,” Ulrich Beck und Ulf Erdmann Ziegler, *eigenes Leben*, München: Verlag C.H.Beck, 9-17.
- , 1997b, “Die uneindeutige Sozialstruktur. Was heißt Armut, was Reichtum in der ‘Selbst-Kultur’?,” Ulrich Beck und Peter Sopp(Hg.), *Individualisierung und Integration*, Opladen: Leske + Budrich, 183-97.
- Beck, Ulrich und Elisabeth Beck-Gernsheim, 1993, “Nicht Autonomie, sondern Bastelbiographie,” *Zeitschrift für Soziologie*, 22 (3) : 178-87.
- Beck, Ulrich, Wolfgang Bonß und Christoph Lau, 2001, “Theorie reflexiver Modernisierung,” Ulrich Beck und Wolfgang Bonß (Hg.), *Die Modernisierung der Moderne*, Frankfurt/M: Suhrkamp Verlag, 11-59.
- Behringer, Luise, 1998, *Lebensführung als Identitätsbildung*, Frankfurt / M: Campus Verlag.
- Bonß, Wolfgang, Felicitas Esser, Joachim Hohl, Helga Pelizäus-Hoffmeister, und Jens Zinn, 2004, “Biographische Sicherheit,” Ulrich Beck und Christoph Lau(Hg.), *Entgrenzung und Entscheidung*, Frankfurt/ M: Suhrkamp Verlag, 211-33.
- Finck, Almut, 1999, *Autobiographisches Schreiben nach dem Ende der Autobiographie*, Münster: Erich Schmidt Verlag.
- Friedrichs, Lutz, 1999, *Autobiographie und Religion der Spätmoderne*, Stuttgart: Kohlhammer Verlag.
- Fuchs-Heinritz, Werner, 2005, *Biographische Forschung*, 3. Aufl., Wiesbaden: VS Verlag für Sozialwissenschaften.
- Hitzler, Ronald und Anette Honer, 1994, “Bastelexistenz,” Ulrich Beck und Elizabeth Beck-Gernsheim (Hg.), *Riskante Freiheiten*, Frankfurt/M: Suhrkamp Verlag, 307-15.
- 井上俊, 1997, 「動機と物語」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学1 現代社会の社会学』岩波書店, 19-46.
- 伊藤美登里, 2003, 『共同の時間と自分の時間——生活史に見る時間意識の日独比較』文化書房博文社。
- 片桐雅隆, 2000, 『自己と「語り」の社会学』世界思想社。
- , 2003, 『過去と記憶の社会学』世界思想社。
- 小林多寿子, 2002, 「物語のなかの他者性」亀山佳明他編『文化社会学への招待』世界思想社, 184-204.
- Kohli, Martin, 1985, “Die Institutionalisierung des Lebenslaufs,” *Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie*, 37(1) : 1-29.
- , 1994, “Institutionalisierung und Individualisierung der Erwerbsbiographie,” *Riskante Freiheiten*, 219-44.
- , 1995, “Lebenslauf,” Bernhard Schäfers (Hg.), *Grundbegriffe der Soziologie*, 4. Aufl., Op-

laden: Leske + Budrich, 177-80.

三上剛史, 2003, 『道徳回帰とモダニティ』 恒星社厚生閣.

Mills, C. Wright, 1963, *Power, Politics and People. The collected Essays of C. Wright Mills*. Edited and with an Introduction by Irving Luis Horowitz, New York: Oxford University Press. (=1971, 青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房.)

Neumann, Bernd, 1970, *Identität und Rollenzwang. Zur Theorie der Autobiographie*, Frankfurt / M: Athenäum Verlag.

野口裕二, 2005, 『ナラティブの臨床社会学』 勁草書房.

Schroer, Markus, 2000, "Negative, positive und ambivalente Individualisierung—erwartbare und überraschende Allianzen," Thomas Kron(Hg.), *Individualisierung und soziologische Theorie*, Opladen: Leske + Budrich, 13-67.

———, 2001, *Das Individuum der Gesellschaft*, Frankfurt/ M: Suhrkamp Verlag.

Vogt, Marianne, 1981, *Autobiographik bürgerlicher Frauen*, Würzburg: Königshausen und Neumann Verlag.

Wohlrab-Sahr, Monika, 1992, "Über den Umgang mit biographischer Unsicherheit – Implikationen der "Modernisierung der Moderne", " *Soziale Welt*, 43(2) : 217-36.

* 本稿は、平成13～15年度文部科学省科学研究費補助金（課題番号13410051 研究代表：城達也）の成果の一部である。